

遅れてきた青年 和田洋一

笠原芳光

(京都精華大学名誉教授)

初冬のやわらかな陽ざしが、あたり一面に瀾漫している午後、西宮市仁川町に和田秋子さんを訪ねた。

九十歳という年齢を感じさせない、この穏やかな女性は何田洋一夫人である。和田洋一氏が一九九三(平成五)年の十二月二〇日に九十歳で亡くなってから、もう五年の歳月が流れた。

京都に生まれ、終生京都に住んだ洋一氏と違って、秋子さんの父親は内村鑑三の末弟内村順也であり、関西学院中学部の英語教師であった関係で神戸に住んでいた。だから阪神間の明るい風光が好き

で、夫の没後は一人娘の悦子さんとその夫君坂田護氏とともに、この地に移り住んだ。

そして近くの関西学院教会に出席している。京都にいたころ、とくに晩年は夫妻ともに教会に行くのが億劫であったが、ここでは昔のことを憶えている人もいて、楽しい日々だという。

ところで和田洋一氏は一九〇三(明治三六)年九月二二日に生まれ、その年に日本基督教会室町教会で幼児洗礼を受け、以来、教会生活を続けたが、しだいにキリスト教に対する懷疑や批判を覚え

るようになった。

亡くなる前年の春であったか、筆者のところへ電話がかかってきて、「赤岩榮の『キリスト教脱出記』を読んだ。話したいことがあるからきてほしい」という。そこで、ひさしぶりに下鴨下川原町の和田邸を訪ねた。

『キリスト教脱出記』をお読みになって、すこしは共感されるところがありましたか」

「いやもう、全面的に賛成です」

これにはおどろいた。そして、いささか心配になってきた。長年、室町教会と

いう正統主義の教会の長老を、それも父親で、当時、同志社大学長であった和田琳熊以来、二代に渡って務めてきた人と言うのだから。

およそ和田氏は新しい考えにはなかなか共鳴できない人である。しかし一度、そこに真理性を見出すと、きわめて率直に賛意を表して、むしろ熱心に人々を説得する。それが、この人の本領であった。

『キリスト教脱出記』が刊行されたのは一九六四（昭和三九）年であり、すでに三十年近くたっていた。この本はキリスト教の開祖とされているイエスが、近年の歴史的研究によると、自らキリストであるとは思わず、称しなかったというところから、キリスト教を脱出しなければイエスに出会うことはできないと論じて、今日の新しいイエス論の先駆となった書である。

しかし和田氏は、この重大な問題にずっとあとになってから気づいた。いったんわかると教会のありかたに率直な疑問を呈し始めたのである。そんなことから教会への出席はとだえがちになった。

夫人からこんな話を聞いた。晩年、教

会にきている全盲の信者にむかって、「あなたは神様が不公平だと思われたことはありませんか」と尋ねたというのである。和田氏自身もそのように感じていたからであろう。その人は返答に窮したが、教会では氏を非難する声もあったという。だが氏は、そのような疑問をまともに語りあうことこそ、信仰を新たにする途だと思つたに違いない。それがなされていないところに教会の微温湯のような事なかれの空気があるのだと。

氏の葬儀は当然、室町教会で行われ、五百人を超える参会者があつた。しかし、のべられた弔辞は篤信の人として称賛する言葉に満ちていた。もしかりに氏がそれを聴いたとすれば、納得することなく、むしろ反論が呈されただろうと、ひそかに思った人も列席者のなかにはいたに違いない。

夫人や悦子さんの話によると、和田氏は家庭ではきわめて穏やかな人であつたという。しかし、たとえば同志社の人文科学研究所における研究会の席上、氏が発言すると雰囲気が一変して、議論がもりあがることをしばしば経験した。それ

和田洋一略歴

1903（明治36）年	9月22日京都市に生誕
1930（昭和5）年	同志社中学、第三高等学校を経て京都帝国大学文学部文学科独逸文学専攻卒業、同志社大学予科講師に就任
1931（昭和6）年	同志社大学予科教授
1935（昭和10）年	中井正一、新村猛、久野収らと月刊誌『世界文化』創刊
1938（昭和13）年	治安維持法違反の疑いで検挙。同志社に辞表を提出
1940（昭和15）年	『大阪時事新報』記者
1943（昭和18）年	ドイツ大使館にて翻訳係
1944（昭和19）年	社団法人独逸文化研究所研究員
1946（昭和21）年	『夕刊京都』理事、文化部長。同志社大学予科教授に復職
1949（昭和24）年	同志社大学文学部（新聞学専攻）教授
1951（昭和26）年	日本新聞学会（現日本マスコミュニケーション学会）創立に尽力。同学会理事（～1965年）
1953（昭和28）年	同志社大学研究所長（現人文科学研究所）
1956（昭和31）年	同志社大学文学部長
1969（昭和44）年	日本新聞学会理事（～1973年）
1974（昭和49）年	定年退職。同志社大学名誉教授
1993（平成5）年	12月20日 逝去

はわざわざアピールしようとして発言するのではなく、氏にとつては自然な気持の流露であつた。そのことを夫人に話すと、家でのありかたとまったく違つているといわれた。

結婚した時、夫人に対して、「自分は家のことはなにもしない」と宣言したという。といつても家族とはきわめてよい関係が保たれていた。夫人はそのために、まさに内助の功をつくされたようである。古風なモラルとはいえ、うるわしい関係であつた。

和田洋一氏は同志社中学から第三高等学校に進み、ドイツ語を学んだ。そして京都帝国大学ではドイツ文学を専攻し、卒業論文は「トーマス・マン論」であつた。この論文は未見であるが、マンの主著『魔の山』にはドイツ・ロマン主義からヒューマニズム、そして民主主義への推移がのべられており、和田氏の思想はマンにおける文学精神よりも、その社会的関心に共鳴する傾向があつた。

そして同志社大学予科の講師をへて教授となり、ドイツ語を教えることに専念しつつ、一九三五（昭和一〇）年二月に、

新村猛、真下信一、中井正一、武谷三男、久野収らの同人とともに、月刊誌『世界文化』を創刊した。

和田氏は「水野七郎」の筆名で創刊号に「第三帝国への絶縁状その他」を書き、一九三七（昭和一二）年九月の終刊第三十四号には「ナチス独逸の宗教闘争」を発表している。『世界文化』は文化・思想雑誌であつたが、当時すでにヨーロッパでも日本でも起こつていたファシズムやナチズムに対する批判がかなり鮮明にのべられている。

和田氏の理念はヒューマニズムであり、自由主義である。それらはかつて大正時代、あるいは第二次大戦後の現代においては、多くの人が賛成し、主張する健全な、そして安全な考えであるといえよう。だが昭和初期から戦争中にかけては、警戒され、そして危険視もされる思想であつた。

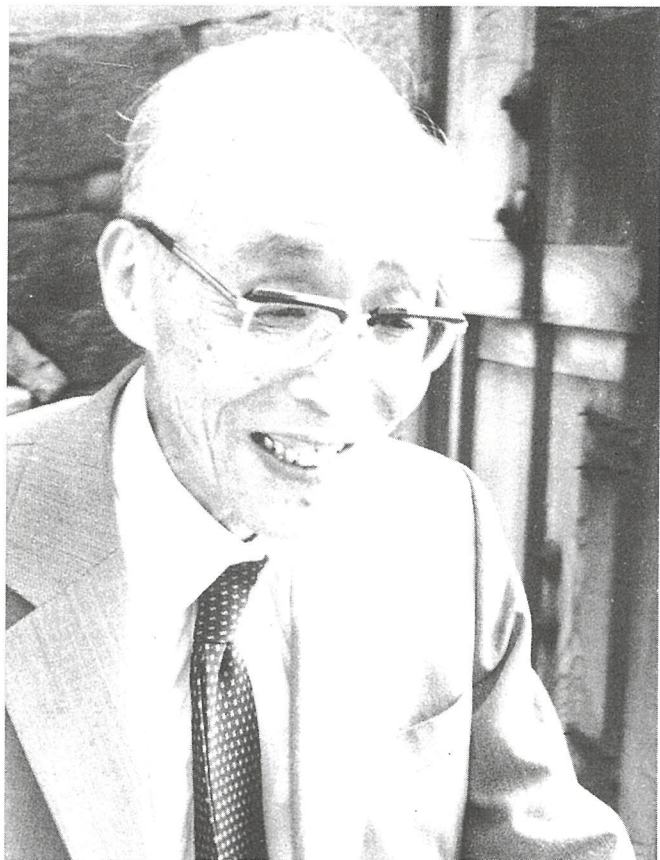
治安維持法が施行された一九二五（大正一四）年五月以降、社会主義者やマルクス主義者はもとより、しだいに自由主義者に対しても、政府当局による取締りが強化されていった。そして『世界文化』

のグループもその対象となり、一九三七（昭和一二）年一月八日に同人の新村猛、真下信一、中井正一、ついで久野収、ねずまさしが治安維持法違反で検挙された。

そして翌年の六月二四日の早朝、特高警察が和田邸をおそつた。新村、真下、和田の三人は当時、同志社大学予科の教授であつたから、これは同志社の歴史においても重要な事件といわねばならない。和田氏が一九五八（昭和二三）年に理論社から出版し、のち小学館発行の『私の昭和史』に収録されている『灰色のユーモア』は、その貴重な記録である。

「玄関に誰か来たようだった。私は寢床の中でうつらうつらしていたが、妻が起きあがり、着物をきかえて、はしご段をおりていった。そして急いでまた二階へ上つてきて『きたよ、警察がきたよ!』と早口でいった」

「私は顔を洗つて応接間へはいった。そこにはすでに特高たちが五、六人、椅子にすわつて私を待っていた。彼らはおおむね無表情であつたが、年かさのかつぷくのいいのが口を切つた。『ながいこと、



わしらのくるのを待つてはりましたやろ
う。そして、ヘッヘッヘッと笑った。ほ
かの特高たちは、おとなしく神妙にすわ
ったままだった。『あんたの仲のいい友達
が、みんな先にきているのやから、あん
たもきた方が友達づきあいがいいやろ

う』と年かさの男がまたいったとき、私
は『そりやそうです』と正直に答えた」
以後、一九三九（昭和一四）年一二
月、治安維持法違反により懲役二
年、執行猶予三年の判決を受けるまで、
警察の留置場と未決拘置所での約一年半

の生活を送った。その詳細は『灰色のユ
ーモア』にのべられている。そこには当
時の和田氏のひょうひょうとした態度
と、そのなかに潜む抵抗の精神が、じつ
によく表現されていて、まさに題名どお
りの書である。

拘留中に同志社を辞し、釈放後は『大
阪時事新報』の記者となり、またドイツ
大使館で翻訳に従事した。戦後、『夕刊京
都』の文化部長を務めたあと、一九四六
（昭和二一）年に同志社大学に復帰し、文
学部新聞学専攻の教授となり、商業高校
長も兼務し、文学部長をも務めた。そし
て一九七四（昭和四九）年に定年退職し、
名誉教授となった。

一九五七（昭和三二）年に同志社大学
の宗教主事になった筆者が和田氏とつき
あうようになったのは、おもに人文科学
研究所のキリスト教社会問題研究会であ
った。氏は若い者をも対等に遇する、よ
き平等主義の人である。そのころの氏は
それほど闊達に発言していなかったよう
に思ったが、しだいに自由率直の人とい
う印象が強くなり、ときに歯に衣着せぬ
正論を吐く氏に感銘するようになった。

以来、この人は老年になるに従って、逆に青年に近づいていくという稀なる存在である。

研究会で同席していると、発表者が綿密な、しかし客観的な研究発表をしたあと、和田氏がとつぜん、「あなたは自分の考えをのべていない。いったい、なにが言いたいのか」といった調子で発言することがあった。発言は鋭いが、それを発する氏の人柄は温かい。このようにして、氏は巧まざるリーダーシップを発揮した。

このようにして氏が責任者となつてまとめられた著作、一九六八（昭和四三）年と翌年にわたつてみず書房から発行された『戦時下抵抗の研究―キリスト者と自由主義者の場合』上下一巻は、世上、きわめて大きな評価を受けた。

それでも氏はいわゆる指導者型の人ではない。生来、訥弁であり、話しあうときには、こちらが氏の言いたいことを推測して、さきに喋ったほうが話が早く進むくらいであった。だが、それはこの人に対しては、こちらが自発的に協力したという気を起こさせるということでも

あった。

それより前、和田洋一編で一九六五（昭和四〇）年と一九七三（昭和四八）年に『同志社の思想家たち』上下一巻が、同志社大学生協出版部から刊行された。和田氏の呼びかけで、鶴見俊輔、竹中正夫、小倉襄二、土肥昭夫、それに筆者などが参加して、新島襄、海老名弾正、徳富蘇峰、大西祝、山室軍平、山本宣治らの評伝を集めたものである。和田氏はここに徳富芦花と湯浅八郎を執筆している。

そして下巻には「同志社の生んだ人間―すぐれた個人から考える大衆へ」と題して、和田、鶴見、笠原による鼎談が載っている。これは同志社の初期には「すぐれた個人」が少なからず輩出されたけれど、現代ではむしろ「考える大衆」ともいべき人々が多く出現しているという趣旨である。

和田氏はこの下巻の発行とおなじ年に『新島襄』を日本基督教団出版局から上梓した。そのなかの最もユニークな部分について、この鼎談のなかで、こう語っている。

「これは、こんどのぼくの『新島襄』に

は書いたのですが、新島が国外脱出するために函館へ行く途中、岩手県の高古に近い港で下船する。港町だから当然怪しげな女がたくさんいて、新島も引っぱりこまれ、思いきりお金をふんだくられる。そのことを日記にちゃんと書いているのですが、のちになって同志社の学生が新島先生の『神聖』を讀すと思つて、カミソリでその部分だけを切りとって捨てしまつていのです」

すると鶴見氏が合槌をうつて、「おもしろいですね。それは、おもしろい」「それは新島を神格化することによって、矮小化している」。この話は新島襄の人間らしさを表すものであり、同時に和田洋一のヒューマニティーもまた示されている。

ところで和田氏が戦後、同志社においてなした最も大きな功績は文学部の新聞学専攻の主任教授としての活躍である。

新聞学専攻は一九四九（昭和二四）年九月という早い時期に発足した。いまでこそ新聞学やマスコミ論は多くの大学で講ぜられているが、戦後間もないころに、これをつくつたのは先見の明というべきであろう。

およそ大学はアカデミズムの府であり、ジャーナリズムは大学にふさわしくないという風潮が、まだあった時代である。しかしアカデミズムとジャーナリズムの両立、総合こそが新しい学術の課題ではないか。

かつて同志社が生んだ最高の英才、哲学者大西祝は東大を出て、早稲田で教えた。大西はアカデミズムとジャーナリズムを両立させた最初の人である。続いては西田幾多郎門下の俊秀、哲学者三木清が京大に残ることを妨げられて法政大学教授となり、そのことがかえってアカデミズムとジャーナリズムの総合に資した。

和田洋一氏は新聞学専攻に、住谷申一、城戸又一、鶴見俊輔、山本明、北村日出男、竹内成明らを集め、戦後同志社の黄金時代の一翼を形成した。彼らの仕事には、まさにアカデミズムとジャーナリズムが調和、融合している。そして、それをもたらしたのは非権威主義の巧まざるリーダー和田洋一であった。

和田氏はすでにのべたように、キリスト教については懐疑を覚え、批判を投げ

て、その革新を念願していた。社会問題に関しても、近年まで共産党とも連帯することを求める人民戦線論者であったが、最後の著書として日本基督教団出版局から一九八四（昭和五九）年に刊行された半自叙伝『私の始末書―キリスト教・革命・戦争』のなかで、「人民戦線はもうやめたと思うようになった」とのべている。朝鮮問題には、かねてから関心があり、「北」の人民共和国に信頼を寄せていたが、のちに『甘やかされた』北朝鮮』という共著を一九八二（昭和五七）年に三一書房から出して、批判をのべた。

和田氏はすべてにわたって晩成型であり、気づくのは遅い。しかし、ひとたび目を覚ますと、きわめて大胆に長所を評価し、短所を指摘する。それが氏の温厚な人柄からの発言であることがわかるから、多くの者が納得するのである。

筆者はかつて和田氏を、大江健三郎の小説の題名を借りて「遅れてきた青年」と評したことがある。それはトラックを廻っている最後尾のランナーが一周遅れのため、あたかも先頭走者のように見えることがあるのに似ている。晩年におけ

る氏の言動は、キリスト教についても、社会問題に関しても、遅れたために、逆にトップを走っていたのである。

和田洋一は老来、ますます青年に近づいていく人であった。遅れたからこそ、最後まで青年でありえたのである。

和田洋一に関する著述として、鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』（世界思想社、一九七九年）は和田氏に有縁の十九人が評論を書き、和田氏も自伝風の文章を書いている好著である。また渡辺武達氏の『未決囚廿一号・和田洋一、拘留所からの手紙―ドキュメント・治安維持法と『灰色のユーモア』時代』（『評論・社会科学』第五三号所収、同志社大学人文学会、一九九五年二月）には和田氏が拘留所から家族、友人らに送った手紙全五十五通が掲載され、編者の論評も加えられており貴重な記録である。